

人情本に関する考察二題

——「清談峯初花」刊行の意義・「花鳥風月」の作者について——

神 保 五 弥

A. 「清談峯初花」刊行の意義

初編二冊文政二年、後編三冊文政四年刊の「清談峯初花」は、独立した中本型式の最初の作品として、人情本成立をいとうと
き無視できない作品であった。しかし、それは従来いわれていた
ように、十返舎一九の作ではなく、何人かの稿本「江戸紫」を一
九が校合して出版したものであった。「清談峯初花」それじたい
は、一九の校合によっても作品としてすぐれたものとはなりえな
かったが、この作品によって中本型式の人情本を出版界に送り出
した一九は、なお「所縁の藤波」六冊を文政四年に、「水加賀美」
三冊を文政五年に発表し、年表の上では、明らかに人情本作者と
しての位置をしめている。「所縁の藤波」が、「清談峯初花」後編
が刊行された同年の文政四年に刊行されることは、稿本「江戸
紫」を中本に仕立てて「清談峯初花」として出版した成功が一九
に筆をとらせたものであったろう。

「清談峯初花」の稿本「江戸紫」については前田愛氏の論文に
詳述されているが、それが貸本屋の手を通じて、写本のまま流布
していたということは、そこに多数の読者の存在が考えられる。
「江戸紫」の成立は前田愛氏によって文化四年九月以降、文政元
年以前となる。しかして、「江戸紫」の内容は、遊里をまったく
離れて、舞台を商家の世界に置き、主人公宗次郎が何人かの女性
と交渉を持つ過程を経て、やがて商人として成功するというもの
であった。このような内容の「江戸紫」を貸本屋の手から借りて愛
読した読者といえ、そこには当然女性の読者の存在が浮びあが
って来よう。女郎買を描いて遊里の世界に限定された洒落本や、
事件の複雑化や新奇を求めて、刺戟をより強くせんために、年毎に
凄惨な作意と画様を仕組んだ敵討物全盛の文化年間の合巻にとり
残された読者——町家の女性こそ、「江戸紫」の読者であったはず
である。版元鶴屋金助はこの点を注目して、「江戸紫」を校合し、
中本「清談峯初花」に仕立てることを一九に依頼したものであろ

う。八十返舎主人。禍福の変化かくの如く。推測べからざる道理を俚談の一举に尽して。頗懇愨の意を備ふ。固より兒女にも馴染く。口調の和き彼先生が膝栗毛の良馬に等しく春宵の睡を寤すの美譚Ⅴという初編晋米斎玉粒の序文も、八賤の男まで。伽羅の油にはそ元結。床髪結物ずきの天窓つき。是も相應の可愛人ありて。色と情のふたつ文字。今ひく牛の角もじの。恋といふ種を女男の神の時そめしより。その道ひらけて。人情のここに止る所いづくの浦も変る事なしⅤという二編一九の自序も、洒落本や合巻の読者ではない、家庭の女性を讀者として意識しての言であつたにちがいない。「江戸紫」を「清談峯初花」に仕立てかえた一九の校合の手ぎわは、けつしてほめられたものではなかつた。しかもなお二編序文に、一九が八去年此書梓行せしより。祥ふに行れたるよしにて。今その次編にいたるⅤといへたのは、女性の讀者に「清談峯初花」前編が歡迎されたものであつたからである。

「所縁の藤波」は、出版界にとつてはまったく新しい、この女性の讀者層を対象として發表されたものであつた。序文に於て、一九は八唯いきほひさかりの年若き方こそ此方の御得意と被存候芝居役者にても菊五部団十郎を眞眞致候人は錢を遣ひ候それ故此書もそこをはり候つもり又は版元御好物の女中がたをはり候つもりにて編候著述に候間色氣たつぷりにいたしⅤという。「正本製」初編（文化十二年）などの刊行をすでに見て、合巻の讀者にもよくやうく女性加わる時代が訪れたものではあるが、一九が版元への書簡の形式で記したこの序文で、八版元御好物の女中がたをはり候つもりにて編候著述Ⅴというとき、「所縁の藤波」の讀者を、

版元栄池堂は明らかに家庭の女性に置いていたものと見る事ができる。このように序文で示した一八九は、しかし「所縁の藤波」では、「清談峯初花」の校合で示したほど、女性を讀者と意識して努力するところがなかつた。地の文に対して会話を独立して描くことなく、会話地の文混合の読本式の文体をもつてしている。会話地の文混合の文語文体による「江戸紫」を、会話と地の文とを分ち、時代俗語によつて会話描写を試みたところに、不手際な校合ながらも「清談峯初花」の成功があつたはずである。そうした文体のなかでのみ、家に閉じこめられた女性は、物語のなかに甘い恋の感触を楽しみうる。読本式の会話地の文混合の物語文体では、教養の浅い女性の讀者は、筋の展開を読みとるのに追われるだけである。後編が、後に二世一九によつて安政六年に刊行されるまで出版を見なかつたことは、そのための不評であつたと考えられる。八此書人情の可否を照し。善縁を得るの排設なればⅤ（序文）という「水加賀美」が、同じく明らかに女性を讀者として意識した上で執筆されながら、初編のみで終つて続編の刊行を見なかつたことも、それがやはり読本式の文体によつて執筆されたものであつたからである。「清談峯初花」という、他の作者の稿本を校合して成つた作品が会話と地の文を分ち、会話が時代俗語によつて描かれていたというのは、そうした校合を可能にさせるだけの内容を、「江戸紫」が持ちえていたことでもあつた。「臘月夜」初編、二編もまた、そうした内容をもつ稿本を一九が校合出版したものであつた。

「臘月夜」初編は奥附を欠くが、序文に八文政七甲子歳春十

返舎一九識Vとあり、年表にいう如く文政七年の刊と見てよからう。序文の末に八予感称のあまり題して朦月夜と命すこと。書肆の需子に應じて。序の言をのみ。斯添るものなりVとあり、内題は八美談於保露月夜 上編Vとのみあり、内題下の署名を欠く。

二編序文の末尾に八干時文政乙酉春正月 五息齋主人述Vとあり、奥附には八江戸 十返舎一九作 溪斎英泉画、乙酉の春新刻発行 東都書林 丁子屋平兵衛 西村与八 小島屋藤七 大阪屋半蔵V、三編は序文奥附ともに欠く。ただし二編の末尾に八此文すべて長文なれば、先ここにて嗣編の筆をさし置き畢ぬ。此三編いろいろ其魂胆おもしろき趣向あり、委敷は又々来西春出版差出し申候Vとある。二、三編ともに内題下の署名を欠くは、初編に同じである。文政乙酉年は文政八年、この末尾の言によれば、二編・三編ともに文政七年に草稿が出来あがっていたと見るべきである。それを初編のみ文政七年に刊行し、二編を翌文政八年に刊行しているのは、版元の事情、恐らくは売行きを心配してのものであったろう。三編の刊行はいつかについては、直接推定する手がかりをもたない。四編・五編はともに文政十年刊、南仙笑楚満人が嗣いで完結するが、五編の東船笑登満人の序文には、八此ふみやすぎの年。十返舎一九のぬし思ひおこして。始めて綴りなせりしを。其頃は此中本てふもの當時のごとは。もてはやさざりしも。まためづらかに作れるより。其が二編をさへつぎて出さば。いよますます愛たしとて。人専らにもてあそべり。その後ふみ屋の乞ふままに。狂訓亭主人まめだちて。是をつぎはの花王木やVとある。三編の板下は初・二編と同一の筆跡であり、内題

下の署名もまた欠いているが、後述するような理由からも一九作ではなく、五編の登満人の序を信じて、二世楚満人の作か、彼の門人たちの何人かの手になるものであろう。

「朦月夜」の初・二編を一九が何人かの稿本を校合、「朦月夜」と題して出版したものと考えるのは、初編序文末尾の一九の言と、初・二編ともに内題下の署名を欠くからである。前田氏によって稿本「江戸紫」を校合して出版したものであることが明らかにされている「清談峯初花」もまた、前後編ともに内題下の署名を欠いていた。鎌倉の商人錦賀と、その隣家西国方の浪人の娘おふきとの恋と、錦賀とおふきが夫婦になれるように世話をした錦賀の友人柳水に、雪の下の質屋の娘お七との恋を描き、柳水とお七はいまだ夫婦にならないままに三編に譲っている「朦月夜」の初・二編は、二組の恋が平行的に描かれることなく、錦賀とおふきの恋が終って、柳水とお七の恋が始まる。その内容に加えるに、物語展開の速度のゆるやかさは、一九じんの手になる「所縁の藤波」や「水加賀美」とちがい、「清談峯初花」と同じく会話と地の文を分けて、会話が時代の俗語によって描かれていることとともに、あきらかに職業的な戯作者や狂言作者ではない、素人作者の手になる稿本が下にあることを示している。ただ第三編にいたって、その内容には急に劇的な脚色加わる。その点からも三編は二世楚満人の手になったものであったと見る。

人情本というジャンルを認めるとすれば、その概念は、全盛期の春水人情本に示された為水流の作風によってすべきものである。救うべからざる思想の貧困はありながらも、二組ないし三

組の三角、四角関係の男女の恋を並行して描き、構想に因われな
いで、場面々々の描写をつみ重ね、物語の展開は作中人物の会話
を通じてすませ、江戸市井風俗の的確な描写と相俟って、情緒的
な甘美のムードを漂わす。そして、そのような人情本のみが、読
本・合巻・狂言に対して、人情本としての独自性を主張しえてい
るのだが、そうした人情本をささえているのは、もとより洗練さ
れた、的確な会話描写を主とする文体であった。

雑多な傾向、内容をふくむ文政度の人情本を、人情本というジ
ャンルにふくめうるとすれば、それらはやがて行きつくところの
方向として、全盛期の春水人情本を指向している、と認められる
べきものでなくてはならない。十返舎一九の「所縁の藤波」や
「水加賀美」は、会話文体を採用していないという点に於て、それ
は人情本と呼ぶのに躊躇せざるを得ないものであった。しかも、
残された「清峯談初花」と「朦朧夜」初・二編がそれぞれ素人作
者の稿本を校合、出版したものであったとすると、十返舎一九
の人情本作者としての地位は極めて低いものとなるわけである。
しかし、「清談峯初花」が挿絵に少くもその半ばを依存した合巻
とちがって、明らかに物語のみをもって婦女子を讀者と予想して
出版されたことは、人情本の歴史の上で、極めて重大な意味をも
つものであった。稿本「江戸紫」を校合して出版した「清談峯初
花」の出現が、やがては多く貸本類をもとり扱っていた書物問屋
文溪堂や文永堂に中形絵入読本（文政度人情本）を刊行せしめ、
せどりを業としていた越前屋長次郎（二世楚瀟人）を戯作者とし
て出発せしめる、一つの契機となったにちがいないからである。

その点では、たしかに十返舎一九は人情本のある意味では先駆者
であった。

二

「清談峯初花」初編が刊行された文政二年の翌年、文政三年に
は一筆庵主人作、溪斎英泉画の「松操物語」三冊が刊行された。一
筆庵主人は画工溪斎英泉その人である。彼が狂言作者として二世
並木五瓶の門人千代田才市を称したのは、文政九年と十年の二ヶ
年ぐらいいであったとは橋口五葉氏の説というが（小島鳥水氏「溪
斎英泉伝」浮世絵志十一号）、他の多くの二流の狂言作者と同じく、
合巻に筆を採って文化十三年には「桜雲春朦朧夜」を発表している
ことを思えば、早くから狂言部屋に遊び、狂言の製作手法はここ
ろえていたものと思われる。それが中本「松操物語」を発表した
のは、もとより「清談峯初花」の出現を契機とする。文政六年刊、
二世楚瀟人作の「八重霞春夕映」初編に、浮世絵師溪斎英泉とし
て序をしるす一筆庵主人は、八さあれば前に何某が江戸紫^{初花の原}_{本と云}
の着古しを。色揚したるもさいわいに。清談峯初花とて返味の
はれ着とせり。Vといっているように、「清談峯初花」の下敷に「江
戸紫」のあることを知っていた。職業的戯作者ではないから、一
筆庵主人は素人作者の稿本が中本「清談峯初花」として誕生した
こと刺戟を受けて、自らも中本「松操物語」を執筆することに、
何の抵抗も感じない。「清談峯初花」刊行の翌年にはただちに中
本「松操物語」が執筆刊行された理由である。一筆庵主人が職業
的戯作者でないことは確かであるが、しかし彼は狂言作者の狂言
の製作手法は心えていた。

それゆえに、「松操物語」は八文の俗なるもて嬰兒にみやすからん為とするのみ只婦女の戒也とするべしVと序文にしろして、明らかに婦女子を読者と予想しながら、劇的な構成に従い、勧懲の立場に立たざるを得なかった。中本という書型の制約は、当然その徹底を妨げる。演劇的な複雑な構想を中本という書型で処理するために、一筆庵主人は物語の内容よりも十六年以前の登場人物のそれぞれの姿を発端にまよめて説明し、その幸福、不幸となるを守護神としての星の運命によるものと説明することによって、合巻から挿絵の部分を除いたにすぎないような生硬なものとして終っている。いうに足りない作品であるが、しかしこの作品の出現は、鼻山人を刺戟して、翌文政四年には東里山人の名で「玉散袖」が刊行される。画工は一筆庵主人の溪斎英泉であった。

鼻山人はすでに文政元年に「晦日の月」「由佳里の月」二部の人情本を発表していた。しかしそれはともに洒落本作者鼻山人の著述であって、書型が中本であるために、便宜的に人情本に入れるものの、内容は末期洒落本の世界をほとんど離れていない。しかし、この二作の後を承けた「玉散袖」は洒落本の世界をまったく脱けたものであった。それが、ちよくせつには「松操物語」の刊行に刺戟されたものであることは、「松操物語」に倣って、書型の制約を考慮して、おなじく冒頭に発端の一章を設定し、物語に登場する人物の幸、不幸をその守護神によるものであることをあらかじめ説明しているなどからも推定できる。「松操物語」

とおなじく版元は文永堂大島屋伝右衛門であること、画工が溪斎英泉であることなどから考えて、本書の刊行には文永堂の鼻山人への働きかけがあったものと推定される。しかし、鼻山人にとって、この作品は名譽ある作品ではなかった。終生彼が捨てえなかった洒落本作家として身につけた通人意識と、それに伴う遊里の世界の描写を物語ここではの中からまったく捨て去っているために、「松操物語」にまして生硬な作品となり、読本的な神秘性と因果思想の強調とに終ってしまっている。本書以後の鼻山人の人情本は、伝奇的構想と遊里情調との調和をついに見ることなく、鼻山人は多数の人情本を発表しながら、天保に入るや春水の全盛にその影を失ってしまうのであった。(近世文学第六輯、拙稿「人情本作者鼻山人について」参照)

三

どのような理由があつて春水にあればどまでの戯作者たらんとの情熱をもたせたかは明らかでない。しかし早く呉服類を商っていた頃から種彦のもとに入りし、戯作者として趣向の一つも思いつくようにと努力し、三馬の門人となって三賢ともなつていた春水は、戯作者たらんとする情熱と戯作好きの性格の故もあつてであろう、せどりを業とするようになって、文政初年には貸本屋青林堂を開業していた。そうした春水にとって、貸本屋の手を通じて行われていた「江戸紫」が刊本「清談峯初花」として再生し、後に狂言作者千代田才市ともなつた一筆庵主人作の演劇的な構想をもつ「松操物語」が出版されたことは、戯作者たらん

と志していた春水にとっては絶好の機会であった。⁽³⁾△天性の閑好漢⁽⁴⁾であり、△廻らぬ才力⁽⁵⁾故にいまだはなばなしい活躍を見せえなかった彼は、△古板表題替悪彫工⁽⁶⁾の版元 青林堂主人⁽⁷⁾△(文政五年、梅暮里谷峨作、「江戸気質浪花梅」の序)としての押しの強さから、狂言作者松島半二が一時の戯れに執筆した稿本を買い求め、兄滝亭鯉丈とともに作者として名を連ねて、自分の店である青林堂から出版することに成功した。文政四年刊の「明烏後正夢」初・二編六冊がそれであった。狂言作者松島半二の稿本であったから、それは「松操物語」とおなじく劇的な構成に従ってはいたが、読者周知の新内「明烏」の後日譚として書かれていたために、原典のもつ抒情性をうけつゝ結果となり、読者の好評を得て、やがては五編で完結する(文政七年)間に、「明烏発端」を文政六年に出版するほどであった。この成功を春水が見逃すはずはない。翌文政五年には「明烏後正夢」三編を出版するとともに、「清談峯初花」に倣って、書肆の持参した何人かの稿本「花月操の松」を添削して「八重霞春夕映」初編三冊を文政六年に発表し、⁽⁵⁾同じ年に狂言作者浜村輔を門人賦亭駒人として迎え、一躍中本作者としての地位を文壇に占めることとなった。

しかし、もとより春水の筆力はそう高くなかったはずである。戯作を好み、⁽⁶⁾記憶がよいのを三馬に賞められていたというのであるから、背に荷物を負つての歩行の途中も読書をしていたという春水であるが、利用できるものはすべて利用して、作者の位置を確保しようとする。『八重霞春夕映』と同じく、何人⁽⁸⁾

かの稿本を校合出版したものが、初・二編を文政九年に、三編を文政十一年に刊行した「婦女今川」であり、「明烏後正夢」と同じく、狂言作者(瀬川如皐)から稿本を買い求めて自分の作として出版したものが、文政七年刊の「軒並娘八丈」、他の作者の(玉川亭調布)の稿本を校閲したと断って出版したものが文政七年刊の「霧籬物語」、彼じしんもそうであった講釈師の台本をゆずりうけ、補綴刊行したものが、文政六年刊(推定)の「長者永代鑑」、先行の洒落本、人情本を嗣いだものが、文政九年刊の「虎之巻後編」、「虎之巻」三編であり、その他、彼が門人といひ、社友という、いわゆる為永連を利用しつつくしていることは、拙稿「梅児誉美まで」で明らかにしたとおりである。

雑多な内容が、中本という書型によって統一されているにすぎない文政度の人情本の把握しがたい性格の混乱は、実に春水が中本作者としての位置を確保しようとする態度から、ある程度まではもたらされたものであった。ある程度までと断るのは、中本は合巻のように挿縮を多くもたず、細字でもなく、浄書、彫刻、製本の費用はすいぶん安くついたからと思われ、出版書肆にとって売出すには恰好のものであったと思われるからである。

このことはまた、文政度人情本への無名の作者の進出を容易ならしめる結果となった。「忠孝水々川」(初編文政八年)「忠義小伊曾物語」(文政十年)の岳亭定岡、「霧籬遠山日記」(文政十年)の知山路猥雄、「谷初音」(文政九年)・「藪の鶯」文政十年の業亭行成、「春駒賦談」(文政十年)の柳泉亭種正、「涼浴衣新地詠織」(文政十年)の桃山人、花山亭笑馬と「鶴毛衣」(文政十年)

を合作した二酔亭佳雪、「青樓色唐紙」（文政十一年）の寛江舎萬丸等々、文政九、十年ごろより、次々と人情本の世界に無名の新人が登場する。文政度の為永連を構成する金水、柳山人、東船笑筈人、文亭綾継たちも、またその中に加えられる。いずれもある意味での文学青年であった。「明鳥後正夢」初編を刊行した当時の二世楚満人もまた、振鷺亭の名のもとに、文政九年以後合巻の作はあったが、やはりそういえる。その彼に松島半二の稿本を買い求め、「明鳥後正夢」として出版せしめたちょくせつの契機が、十返舎一九の校合による「清談峯初花」の刊行であり、二世楚満人がこれによって戯作者の位置を確保し、それに刺戟されて、無名の新人が人情本の世界につきつぎに登場する。そのうちの幾人かを自分の周囲に集めえた二世楚満人が、彼らの助力を得て、為永流の作風を完成したことを思えば、「清談峯初花」刊行の意義は、結果としてはきわめて大きいものであったと思わざるをえない。

註 (1) 前田愛氏「江戸紫——人情本における素人作者の役割」

（国語と国文学昭和三三年六月）以下前田愛氏の論文としてひくものは、すべてこれである。

(2) 「寝覚繰言」初編序文参照。

(3) 右におなじ。

(4) 「八重霧春夕映」初編序文。「国文学研究」第十四輯の拙稿「梅児誉美まで」参照。

(5) 「国文学研究」第十一輯拙稿「二世楚満人作人情本に就ての疑問」参照。

(6) 註(2)に同じ。

(7) 「譚海」為永春水の条参照。

(8) 「婦女今川」序文参照。

(9) 「浮世床」第三編（文政六年刊）上巻口絵に髪結床の入口を描き、出入口の障子に次のような報条がかけてある。すなわち「報条、前座 御幣川の仇討、後座 紀文大尽ものがたり 当秋中句青林堂にてうり出し申し候 さくしや 延樹」これにより、二世楚満人補綴の「長者永代鑑」は、延樹なる講釈師の講釈用台本を中本として刊行したもの、また年表で刊年未詳となっている本書は、文政六年秋の刊行なることが判明する。

B 人情本「花鳥風月」の作者について

人情本「花鳥風月」四編十二冊は、山崎麓氏の「日本小説書目年表」によれば、初・二編は竹葉舎金瓶作、為永春水校、天保年間刊。三・四編は梅亭金鷺作、弘化初年刊とある。ところが、鶯亭金升氏は「梅亭金鷺翁」（文芸倶楽部明治二八年二月三月）で、ハ花鳥風月なる人情本は、金瓶とあれど真は翁の作なりといふと記されている。末期戯作の研究者興津要氏は、初め「學術研究」第四号の「梅亭金鷺の研究」では、金升氏に従って全四編金鷺の作とされたが新刊の「転換期の文学」では、ハ金鷺作であることをおもわせる作品Vであるが、ハ初・二編のアイディアは金瓶に出て、執筆は金鷺、三編以降は完全に金鷺作とかがえらるVとされている。これに対し、私は初・二編は金瓶作、三、四編を

金鷲が嗣作発表したものとする。以下はその考証である。

まず、考証に必要な部分を「花鳥風月」から抜いてみる。

○初・二編内題下の署名は、△狂訓亭主人訂著▽

○初編序文の末尾は、△然れども拙き禿筆には、野暮流行に後れたる条も多くあらざめれど。藪鶯の廻らぬ舌と。御許しの程を願ふのみ。竹葉書屋に 金瓶述▽

○二編序文は南仙居柚人の署名があるが、その前半は、△お江戸の美しきかの神田川の橋側に筆意を磨く金瓶ぬしは号となしたる山河に風のかけたるしがらみのあへぬ流れをくみわけて恋の浮世の人情に気をもみぢばの色よく綴りあげたる花鳥風月予は初編のおもむきもいまだいささかしら梅のかほりも止め其うちに此二編の序といひも扱おこがましき▽

○二編卷之上本文中に、△鈍作の金瓶如きが筆を持て訂正するに及ばねば古作のままに顯すなり▽

○三・四編内題下の署名は、△東都梅亭金鷲編次▽

○三編の序文に、△此書訂著。狂訓亭主人とあれど。実は竹葉舎金瓶子の作にして。初編二編の稿なる後。惜いかな彼人は。早く故人の数に入るゆゑ。梓人の主人より僕と金瓶子は同じ社中の因みを以て後を書よと託せられ。然もなきとても友がきの思い起せしなれば。半途に止んも本意ならず。と心に懸りし折なる故。何は兎もあれ請込ものから。(略)やつの事で三編三巻を。渡付はこねつけれたど、竹に木をつぐ拙い手際に。馴染の悪しき其ところを。竹葉舎がものさしを。梅亭が継ばならんと。御ゆるし御高覧を願ふになん。

驚溪書屋に 梅亭金鷲述▽

○四編の序文の末に、△毫の担端へ駈込者は是梅亭の主人にて。一昨年以来の騒がしきに。人情本でも有めへと。既に四編も出来ては居たれど。其儘机の引出しの主ともなれと打込置しに。今朝白銀町から出掛けて来て。世界は既に太平腹鼓。花鳥風月の折からなるに。例の満尾を如何にせしや。と小言いはれて取敢ず。此草稿は看せたれど。序文はお前に託してあれば。夫れを貰ひに来やしたと、聞いて此方も不拔顔に。点頭ものから投げ遣りの。天窓と文字とを一度に書き。モシ金鷲大人。棧橋へ着く船ではないが、此の書はずんと当りやすぜと。祝すを当座のしほにして。時の儘をば並べ立て、爰に記して序言に代へぬ。

蔵六庵甲羅述▽

註、ここに私がひく四編の序文を、興津氏は初編の序文としてひいておられ、それをもととして初、二編のアイデアを金瓶、執筆は金鷲とされるが(転換期の文学)、しかし、これは誤りであった。氏の見られた本は早大図書館蔵の「花鳥風月」であろうが、同書は初編序文口絵と四編序文口絵とが綴じちがえになっておるのである。

初・二編を為永春水校とする「年表」の記述は、△狂訓亭主人訂著▽とある狂訓亭主人を、そのまま初代為永春水とするからである。二世春水ではないかとの疑問も当然持つべきであったし、また、二世春水の染崎延房とは思えない為永栄二なる人物が、末期の人情本の口絵や挿絵に賛を寄せていることは、少しく氣をつけて見ればただちに気づくことである。為永栄二は、金鷲作の

「七偏人」の口絵に賛を寄せて、教訓享栄二としている。合巻作者には為永瓢長なる人物もあるし、また「花鳥風月」二編序文の筆者南仙居杣人もある。これらの人が狂訓亭主人と名のらなかつたと断言できない。少くも、「花鳥風月」初・二編内題下の八狂訓亭主人訂著を、ただちに初代為永春水に還元するわけにはいかない。しかも「花鳥風月」二編巻之上の本文中の記事によれば、校訂者としての位置は、狂訓亭主人ではなくむしろ竹葉舎金瓶その人である。しかも金瓶は、初編序文に、初編は自作であるかの如く述べる。二編序文の筆者南仙居杣人は初編を見たと断りながら、初・二編ともに竹葉舎金瓶の作という。さらに三・四編内題下の署名に、三・四編が自作たることを明らかにしている。金瓶は、三編序文で初・二編の作は金瓶の手になることをいう。杣人と金瓶の言は信じてよいかどうか。

南仙居杣人が誰であるかは疑問のままに、彼が同じく人情本「春色梅辻占」三編九冊の作者南仙笑杣人と同一人であることは、たしかにいえそうである。というのは、南仙居杣人は「花鳥風月」二編の序文に署名して、八梁山と印記を置いている。「春色梅辻占」の初編内題下の署名に梁山樵夫、二編のそれに寿艸亭と肩書する南仙笑杣人は、三編自序の署名に、印記しておなじく八梁山と印記する。この二つはその形式において一致している。

「花鳥風月」二編の杣人の序文中に、八金瓶ぬしは号となしたる山河とある。竹葉舎金瓶はまた山河金瓶とも呼んだのではないかと思う。「春色梅辻占」初編巻之上挿絵に、賛として八山

川金瓶題とする狂詠一首があった。

「春色梅辻占」二編序文の筆者は樵亭漁夫である。樵亭漁夫が梅亭金瓶であることは周知のとおりである。竹葉舎金瓶と南仙居杣人は序文を頼まれ、寄せる関係にあり、南仙居杣人と梅亭金瓶の関係もそうである。「花鳥風月」三編の序文、および驚亭金升氏の「梅亭金瓶翁」の記述八松亭に出入する雅人と、日毎の遊戲に飽かず、其頃親く交はりしは、万亭応賀を初めとして竹葉舎金瓶……から、ともに松亭金水門であったことが知られる。以上の関係から、山川金瓶は竹葉舎金瓶と同一人であり、金瓶・杣人・杣人の三者は交友関係にあったことが知られる。その金瓶・杣人の二人が、「花鳥風月」の初・二編の作者が竹葉舎金瓶たることを明らかにするのであるから、これは信じてよいものである。金升氏の言のごとく、梅亭金瓶の作ではない。しかも二編巻之上の本文中には、鈍作の金瓶が訂正するよりも、むしろ古作のままに頭すことにするという、金瓶じしんの記述がある。とすれば何人かの稿本があつて、金瓶がそれに手を加えて「花鳥風月」初・二編がなつたとしか考えられない。その何人が誰であるかはわからない。いえることは、為永春水が校訂したものではなかつたし、金瓶のアイデアを金瓶が作品として執筆したものではなかつた、ということである。

「花鳥風月」初・二編の刊行はいつであつたか。おおよその推定はつく。山崎氏の「年表」が初・二編を天保年間刊としたのは、村上静人氏の人情本刊行会本「花鳥風月」の解説によるもの

であらう。村上氏は、四編序文で、序文の筆者蔵六庵甲羅が、梅亭金鷺の言としてしるす、ハ一昨年以来の騒しき口Vとある一昨年を、天保十二年の風俗取締令をさすものとされ、初・二編を天保十二年以前のそう遠くない年の刊行とされ、したがって四編は弘化元年ごろあたりの刊行とされている。尾崎久弥氏もまた同じである。(「梅亭金鷺の作物と晩年」―軟派漫筆)。「江戸文学辞典」では、竹葉舎金瓶が安政四年に「勸善飯」二・三編を出し、「花鳥風月」とこの作品以外には作品を見ないことから、「花鳥風月」初・二編を刊行してまもなく金瓶は死亡したものであらう。したがって四編のハ一昨年Vというのは明治維新をさすものであり、四編は明治初年の刊行であらうとされている。明らかに「江戸文学辞典」が正しい。しかし「江戸文学辞典」では、初・二編の刊行はやはり天保年間とされている。

「花鳥風月」二編の序が南仙居拙人の序を有することは述べたとおりである。その南仙居拙人の人情本「春色梅辻占」三編巻之上の挿絵に、山川金瓶の狂詠一首が賛として載っていた。ところが、「春色梅辻占」初編巻之中第三回の本文中に、この作品の主人公お梅の母お角がいまはかなく暮しているのは、先年の大地震のために夫と死にわかれたからだ、とのことばがある。「春色梅辻占」初編は、明らかに安政二年十月二日、江戸を襲った大地震以後の刊行であることがわかる。拙人が「花鳥風月」二編に序を寄せ、金瓶が「春色梅辻占」初編挿絵に狂詠一首の賛を寄せていることは、この二人が交際があったことを示す。ただし、それは二人の交友時期が、安政二年以後に初まったとはいえない。それ

以前に二人の交際があったかも知れず、「花鳥風月」初・二編が天保年間という可能性は依然として残る。しかし、「花鳥風月」三編自序で、金鷺が金瓶と自分とは同じ社中であつたという。金鷺が松亭金水の門に入つたのは、金升氏の「梅亭金鷺翁」によれば、嘉永の初年、友人服部応質に伴はれてのことであつたとする。金鷺のそのころの松亭門下の友人に、金瓶がいたことがまたしるされているが、しかしこれも金鷺が松亭門下に加わる以前に、すでに金瓶が松亭の門人であつたかもしれない。そこで、「花鳥風月」の口絵や挿絵に賛を寄せる人を見ると、芦月、芦扇、芦貢、八果、金蝶、金猫、竹亭らである。これらの人がどういう人であるかは、はっきりしないが、しかしいずれも金鷺の他の人情本の挿絵や口絵に発句や狂詠の賛をよせる人ばかりである。芦月は「春色梅辻占」三編巻之中的の挿絵にも賛を寄せていた。これらのことを総合してみると、「花鳥風月」初・二編の刊行を天保年間とすることは無理である。安政年間の刊とすべきであらう。「花鳥風月」初・二編の作者竹葉舎金瓶は、「日本小説作家人名辞書」では、竹葉舎一瓢とする。竹葉舎一瓢は柳亭梅彦である。梅彦には「艶色鏡」その他の人情本の作がある。しかし、一瓢と金瓶とが同一人という証拠は、いまのところ見当らないし、梅彦についての鈴木行三氏の研究も、信頼できないところがあり、まだ明確でないことが多い。作者竹葉舎金瓶についての詳しい考察は後に俟ちたい。